



牛の好酸球性皮膚炎～ランピースキン病との鑑別～

岩手県中央家畜保健衛生所

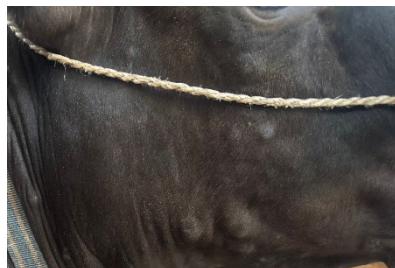
好酸球性皮膚炎は非感染性の皮膚病であり、アレルギーが原因と考えられています。類似した病変を示す疾病にランピースキン病（LSD）があります。LSDは、ウイルスによって引き起こされる牛や水牛の病気であり、国内では、2024年11月に福岡県で初めて発生し、同年12月26日までに福岡県（19農場）及び熊本県（3農場）で発生が確認されています。LSD発生時には、法令に基づいた迅速な防疫措置がとられます。

好酸球性皮膚炎の病変は、LSDのそれと類似するため鑑別が必要となります。

1 発生概要

県央管内の黒毛和種繁殖農場で、2025年6月27日、飼養する成牛1頭の頭頸部、前後肢及び乳房周辺に2～3 cm程度の結節がみられるとの通報が臨床獣医師からありました。また、同年7月14日、同農場の他の牛にも同様の結節がみられるとの通報がありました。発症牛に対してはイベルメクチン外用剤が塗布されていましたが、皮膚結節は退縮しませんでした。

両例ともに、当所が農場へ立入り、調査及び検査を行いました。なお、同農場は県外との関連はありませんでした。



好酸球性皮膚炎と診断された牛の結節病変（R7 当県発生事例）

2 検査成績

両例において、発症牛及び同居牛に発熱や表在リンパ節の腫大は認められませんでした。発症牛の皮膚結節を生検トレパンにて採取し、得られた生検スタンプ標本を鏡検したところ、多数の好酸球及び好中球が確認されました。痂皮から有意菌は分離されませんでした。皮膚結節の組織では、表皮角質層、有棘層及び真皮浅層において、好中球及び好酸球を主とする炎症細胞浸潤が重度に認められました。好酸球を主とする炎症細胞浸潤は真皮深層の血管周囲にも中等度に観察されました。



国内発生のランピースキン病発症牛の外貌（農林水産省提供）

3 考察

検査成績及び疫学調査によりLSDは否定され、両例は好酸球性皮膚炎と診断されました。本疾病の原因はアレルギー反応といわれていますが、原因の特定には至りませんでした。本疾病はステロイド製剤に対し良好に反応することが報告されています。発症牛に対し、ヒスタミン製剤が約1週間投薬されましたが、皮膚結節の退縮まで約1か月間を要しました。

本疾病にみられる病変は、LSDの初期病変と類似するため鑑別が必要であり、正確かつ迅速な診断が求められます。LSDの早期発見を念頭においた「毎日の健康観察」と「異状が確認された場合の早期通報」が重要です。

表 好酸球性皮膚炎とLSDの比較

疾病名	疫学的背景	原因	皮膚病変	備考
好酸球性皮膚炎	飼料変更、環境アレルギー	アレルギー	丘疹・痂皮	
LSD	感染牛移入、吸血昆虫媒介	LSD ウイルス	硬結性結節・壊死	発熱、リンパ節腫大

※「病性鑑定通信」は、当所で実施している病性鑑定から、今後の診断の参考になる症例、注意喚起等が必要な情報等をまとめたものです。

なお、中央家保ホームページには、過去の記事も掲載しています。

「病性鑑定通信」へのリンクは↓こちら↓です。または、「岩手県中央家畜保健衛生所 病性鑑定通信」で検索してください。

<https://www.pref.iwate.jp/sangyoukoyou/nougyou/desaki/chuuou/1008059/1047433/index.html>